



翻訳と印刷を中心とした「ミッション・プレス」の言語文化史的研究

人文科学系・言語文化学領域

鈴木 広光

教授

SUZUKI Hiromitsu

文学修士(名古屋大学)

■研究キーワード 文献学, 翻訳論, 分析書誌学, 印刷史, ミッション・プレス, キリシタン版, 活字書体

■主な所属学会 日本語学会, キリスト教史学会, 日本近世文学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.5a00f0bb41ed3341520e17560c007669.html>



研究者総覧

研究概要

「ミッション・プレス」とは、大航海時代以降、キリスト教宣教師が世界各地で展開した宗教書の翻訳、語学書の編纂と活字印刷術による出版の活動の総体を指します。スペイン・ポルトガルを後ろ盾にした16～18世紀におけるカトリック宣教師の活動と19世紀の英米の世界進出(特にアジア)に伴うプロテスタント宣教師の活動という二つの大きな波があり、日本は二度ともその波をかぶりしました。私の研究は軸足を16～17世紀の日本イエズス会と19世紀の香港・上海におけるプロテスタント各派の言語文化的活動の包括的な解明に置いていますが、他の布教地における活動との比較を視野に入れながら、以下の課題に取り組んでいます。

1. 神、聖霊、霊魂と肉体、愛などキリスト教の基本概念を日本語訳、中国語訳するにあたって、どのような問題が生じたのか。また宣教師たちは翻訳に際して、日本や中国の宗教思想をどのように解釈したのか。
2. 翻訳宗教書・聖書を印刷するための漢字、仮名は如何にして西洋式金属活字に載せられたのか。



図1 コンテムツス・ムンチ原典



図2 『日本語活字印刷史』

アピールポイント

1. 日本イエズス会による宗教書の翻訳研究については、原典と翻訳書をテキスト・レベルで徹底して比較することに主眼を置いています。有名な『キリストにならいて』の日本語訳『コンテムツス・ムンチ』は同時代に多くの版が存在するため翻訳底本不明でしたが、ラテン語版本の本文比較を通して最も日本語訳とよく対応する版をある程度まで絞り込み、スペイン語訳の関与も小さくないことを明らかにしました。(図1)
2. 19世紀後半の聖書中国語訳の場において、キリスト教の〈神〉に相応しい中国語は「上帝」か「神」かについての論争がありました。宣教師たちは中国古典とその注釈書を研究し、論文や著書をいくつも書いて論陣を張りました。この論争が決着を見ずに各々が主張するヴァージョンを刊行したことは有名ですが、両派の真の論点や中国観の違いまでは明らかになっていませんでした。私は東洋文庫所蔵の問題に関する資料群をもとにそれらを整理・分析することで、この問題を解明しました。
3. 近代日本の明朝体活字は、19世紀後半に英米宣教師たちが主に漢訳聖書を印刷するために香港・上海などで開発した漢字活字を複製したものです。宣教師たちは必ずしも活字とは相性がよくない漢字を如何にして印刷術のシステムに載せることができるか、この文字を研究しています。私はその具体的な明らかにし、著書『日本語活字印刷史』にまとめました。本書は2019年に第8回ゲスナー賞「本の本」部門金賞を受賞しています。(図2)